

よみがえれ、イタセンバラ！ ～生物多様性保全の取り組み～

淀川水系イタセンバラ保全市民ネットワーク

はじめに

淀川水系イタセンバラ保全市民ネットワーク（略称：イタセンネット）は、淀川水系における生物多様性の保全・回復を大きな目標とし、淀川のシンボルフィッシュと呼ばれ、天然記念物で且つ国内希少野生動植物種に指定されている淡水魚のイタセンバラ^{*1}の野生復帰を支援しています。

淀川に生息しているイタセンバラは、小中学校で使用されているいくつかの理科の教科書に掲載されており、全国で多くの児童生徒らがイタセンバラを通して生物多様性保全や希少生物保護の意義を学んでいます。そんなイタセンバラですが、河川改修による生息環境の悪化、さらに、特定外来生物に指定されているブルーギルやブラックバスの大量繁殖による食害等で、平成17年を最後に、淀川からその姿を消してしまいました。確認できなくなった当時、大阪では新聞やテレビ等で何度もそのニュースが報道されました。

地域住民の記憶からイタセンバラが消えないうちに、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所と大阪府立環境農林水産総合研究所は共同で、イタセンバラの野生復帰プロジェクトを開始しました。平成21年に初めて試行的な放流が行われましたが、密漁防

止の観点から、放流場所の公表に踏み切れないなど、希少生物の保護を行政主導で進めることに限界が生じていました。そこで、平成23年8月、地域の市民団体や企業、大学や行政など多様な主体が連携し「ふたたび淀川にイタセンバラを泳がせよう！」を合言葉に、イタセンネットはスタートしました。当初17団体でしたが、現在では34団体にまでその輪が広がっています。

主な活動内容

・城北ワンド群^{*2}における保全活動

市民の手によるイタセンバラの野生復帰を目指して、平成24年度より、かつてのイタセンバラの一大生息地として知られている淀川の城北ワンド群（大阪市旭区）において、保全活動を行っています。城北ワンド群のうち、これまでイタセンバラの生息数が多かったワンドを2か所選び、4月から11月の月2回（基本第1土曜、第3日曜の午前中）、籠モンドリや30mの地曳網等を用いてブルーギルやブラックバスなどの外来魚を駆除するとともに、採捕した魚の調査をしています。また、同じく特定外来生物種の水生植物であるナガエツルノゲイトウ等の除草や河川清掃等も行っています。

さらに、地域の方に外来種問題を広く知っていただくため、春と秋には城北ワンド群全域で外来魚駆除釣り大会を開催しています。地域の方に気軽に参加していただくため、釣り道具の貸出しやエサの支給も行っています。天候にもよりますが、毎回200～400名の皆さまに参加いただいています。

このように、活動開始から約3年間に、城北ワンド群で保全の取り組みを48回実施し、約11,000尾の外来魚を駆除しました。参加者は延べ約4,300名にもなります。



イタセンバラ



城北ワンド群（大阪市旭区）



籠モンドリによる外来魚駆除



地曳網による外来魚駆除



外来魚駆除釣り大会

・地域に根差した情報の共有と発信

平成25年9月25日には、地域の希少生物を地元の宝物として大切に守り伝えるため、城北ワンド群に隣接する大阪工業大学のOITホールをお借りして、「第6回淡水魚保全シンポジウム淀川大会～地域でまもり、みんなで育む淡水魚～」を淡水魚保全研究会と共同で開催しました。シンポジウムには、秋篠宮殿下にご臨席を賜り、著名な大学教授による講演やパネルディスカッションが行われました。地元をはじめ全国各地から約300名の方に参加いただき、中高生を含む46課題のポスター発表も行われました。

また、大阪市立自然史博物館主催の大阪自然史フェスティバル等の地域イベントに積極的に出展し、淀川の生物多様性やイタセンパラの現状を広く伝える取り組みも行っています。



第6回淡水魚保全シンポジウム淀川大会

・水辺リーダーの育成

連携団体に大学関係者が多いことから、大学の教員などが講師となって学生や市民向けに水辺リーダー養成講座を開講しています。受講者が自主的に生物多様性保全活動のリーダーシップを発揮できるように、各専門の教員等による生物多様性保全の必要性や外来種問題、市民連携の進め方や水辺の安全対策などの講義を行いました。平成24年度から毎年9講座開設し、延べ約270人の方に受講いただきました。



水辺リーダー養成講座

・保全活動を継続させる仕組みづくり

希少生物保護のような生物多様性の保全活動に取り組むうえで、一つの大きな課題となっているのが、参加者の高齢化と固定化です。現在、保全活動に積極的に取り組む若者が少ないのが現状です。そこで当会では、若者に広く参加を呼びかけるため、多様な大学等のサークル活動との連携を重視しました。その結果、これまでこのような保全活動に参加していたのは農学や理学などの理系の学生が中心でしたが、経済や商学を学ぶ文系の学生や、ボランティア活動を主たる目的とする学生サークルや研究室など、専攻にとらわれない多様な参画が得られるようになりました。

また、地域の企業に対して、CSR活動（社会貢献）の一環として従業員の研修やボランティア参加等と呼びかけたところ、当会の趣旨に賛同し連携団体に加わっていただける企業も増え始めています。

市民の手による野生復帰

イタセンネットでは、淀川城北ワンド群において、魚類調査や、外来魚駆除や河川清掃を定期的に行うとともに、密漁防止につながる啓発活動を精力的に続けてきました。その成果が実を結び、イタセンバラの野生復帰プロジェクトを進めている淀川河川事務所と大阪府立環境農林水産総合研究所は、外来魚駆除や密漁防止など継続した保全体制が整ったものと判断し、当会が保全活動を続けてきた城北ワンド群において、公開放流によるイタセンバラの野生復帰を決定しました。

平成25年10月10日に開催された「淀川城北ワンド群イタセンバラ放流式」には、野生復帰の実施主体である国土交通省近畿地方整備局や大阪府立環境農林水産総合研究所の代表者をはじめ、環境省近畿地方

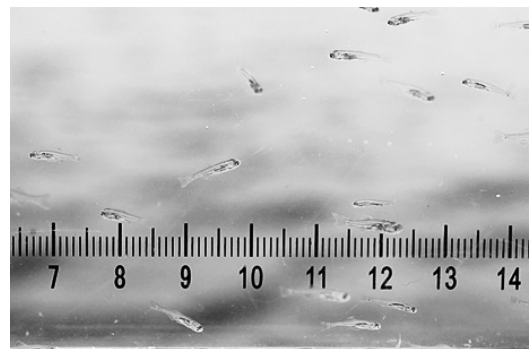


淀川城北ワンド群イタセンバラ放流式

環境事務所長、大阪府副知事、大阪市旭区長、イタセンネットの関係者や地元小中学生ら約120名が参加しました。地元の児童らが、紫色に色付く美しいイタセンバラの親魚500尾を淀川に放流し、念願の市民の手による野生復帰が実現しました。その様子は多くのメディアに取り上げられました。

今後の取り組み

希少生物の野生復帰の取り組みは、すでにトキやコウノトリなどでは実施されていますが、都市域において多様な主体が連携し、継続した保全体制が確立された事例は、今回が初めてです。そのため、全国的な先進モ



イタセンバラの稚魚



大きく成長したイタセンバラ

デル事例とされて注目されており、平成25年の日本魚類学会の市民公開シンポジウムにおいても、大規模な野生復帰事例と、それを支援し安定した定着を目指した保全活動の成功例として取り上げられました。

また、城北ワンド群の地元の大阪市旭区役所では、街づくりにイタセンパラを取り込み、マスコットキャラクターを公募で作成するとともに、イタセンパラを区の魚に指定する取り組みも進められています。

城北ワンド群に放流したイタセンパラは自然繁殖し平成26年春、次世代の稚魚が750尾確認されました。さらに、それらが順調に大きく成長していることもわかりました。今後は、その命を二度と絶やさないように見守り続け、地域に根ざした生物多様性の保全活動に取り組むたいと考えています。さらに、生息域拡大に向けて、更なる外来魚駆除活動や河川清掃、啓発活動に取り組む予定です。また、他の地域で活躍されている団体等と連携を強化するなど、生物多様性保全のノウハウ共有を進めたいと思います。

連携団体一覧（平成27年5月1日現在、34団体）

【市民団体など】

- 旭昼市運営委員会
- 一般社団法人 水生生物保全協会
- 公益財団法人 河川財団 近畿事務所
- 公益社団法人 大阪自然環境保全協会
- 水生生物センター・サポートスタッフ
- せいわエコクラブ
- NPO 法人 nature works
- NPO 法人 エコネット近畿
- NPO 法人 大阪府海域美化安全協会
- 人を自然に近づける川いい会
- 琵琶湖を戻す会
- 淀川管内河川レンジャー
- 淀川水系イタセンパラ研究会
- 淀川を守ろう会

【学校関係】

- 大阪工業大学 城北水辺クラブ
- 大阪産業大学 エコ推進プロジェクト
- 大阪産業大学 水生生物研究室
- 大阪商業大学 経済学部 原田ゼミナール
- 大阪府立大学 キャンパスビオトープ研究会
- 大阪府立大学 里環境の会OPU
- 近畿大学 バスバスターズ

- 摂南大学 エコシビル部
- ルネサンス大阪高等学校 環境保全クラブ

【企業】

- 大阪トヨタ自動車株式会社 CSR・お客様相談室
- 大阪トヨタ豊友会 地域貢献倶楽部
- 京都水族館
- パシフィックコンサルタンツ株式会社
- パナソニック エコリレー ジャパン
- パナソニック松愛会 大阪市内支部

【行政】

- 環境省 近畿地方環境事務所
- 国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所
- 大阪府環境農林水産部 みどり企画課
- 大阪市旭区役所 市民協働課 にぎわい創出担当
- 大阪府立環境農林水産総合研究所

*1イタセンパラ

コイ科タナゴ類の日本固有の淡水魚で、淀川水系のほか、濃尾平野、富山平野の3つの地域に局所的に分布しています。どの地域も環境の悪化等で近年個体数が非常に減少しており、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧IA類に選定されています。そして、環境省は種の保存法（絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律）で国内希少野生動植物種に、文化庁が文化財保護法により天然記念物に指定しています。

秋の産卵期には、雄は紫色に色づき、雌は生きているイシガイ科二枚貝の体内に卵を産み込むというユニークな繁殖生態をもっています。産み込まれた卵は、貝の体内でふ化し、そのまま冬を越して春に貝から泳ぎ出ます。そして、その年の秋には産卵し、その多くは1年で死んでしまいます。

その美しさと希少性から、密漁が後を絶たず、平成22年に木曽川流域で、さらに平成26年には富山県で密漁者が逮捕されています。

*2城北ワンド群

ワンドとは、川岸に沿って並んだ池のような水域を指します。淀川では、明治期に大型の蒸気船を就航させるため、兩岸から川の流れに対し直角に、一定間隔で真っすぐ石を積み、川の中央に流れを集めて、その力で川底を深く削る河川改修が行われました。その石積みを骨格として形成された池がワンドと呼ばれています。淀川には、かつてワンドが500以上もあったのですが、現在では50ほどにまで減少しています。そのうち最も大規模に残存しているのが、都心部の大阪市旭区に位置する城北ワンド群です。1km以上にわたって20ほどのワンドが連続しています。

現在このワンドという言葉は、広く一般的に用いられ、河川の入江や淀み、河川敷内にできた池を指して使われる場合もあります。

淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク